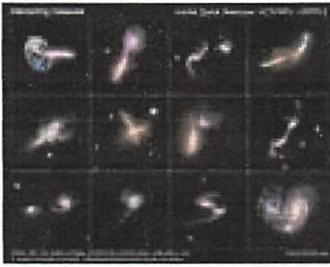
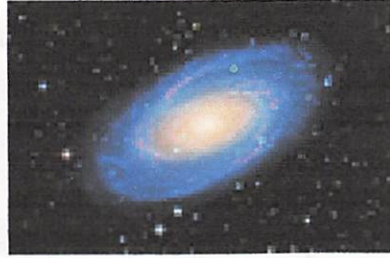


宇宙は規則正しい法則によって運動しています

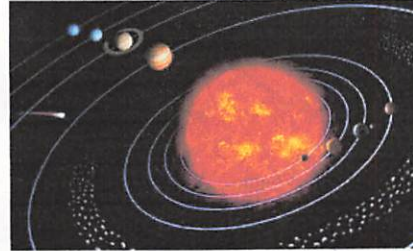
銀河の数々



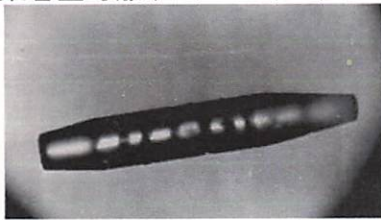
銀河の一例



太陽系の一例



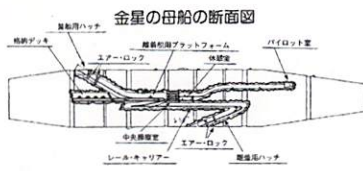
葉巻型母船(マザーシップ)



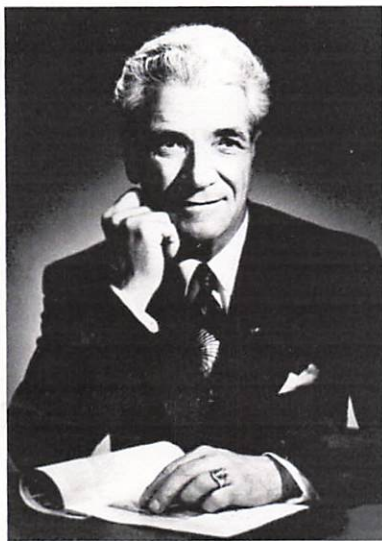
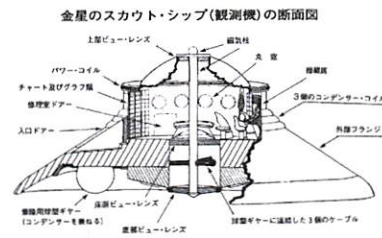
母船から偵察機の発射



アダムスキー型偵察機(スカウトシップ)



地球の飛行機



ジョージ・アダムスキー



金星人・オーソン

ジョージ・アダムスキーは  
アメリカ、カリフォルニア州の  
デザートセンターで円盤から下りた  
金星人・オーソンと会見し、その後  
母船に乗って金星他へ行きました  
(砂漠の会見は1952年11月20日)

しとはずいぶん変わって道路が整備され、ガソリンスタンドも建て替えられている。

ここはアリゾナ州境の町ブライズへ行く道とパークアダムの方へ行く道の分岐点になるので、コンタクト地点へ行くにはまずこのテキサコ・ガソリンスタンドを目標に行けばよい。

ここへ到着すると、ガソリンスタンド前の道路をへだてた角に標識があるので、それを見て、Parkerと書いて矢印で示してある方向へ行く。つまりガソリンスタンド前を直進すればよいのである。

ここからが重要だ。というのはアダムスキーの『宇宙からの訪問者』によると、一九五二年十一月二十日にアダムスキー一行は、このパークアダム街道を約十七キロメートル(約十一マイル)行った地点で停車して降りたと述べてあるので、とかく十一マイルという数字にこだわりがちになるのだが、この位置は一同が最初に母船を目撃した場所であって、アダムスキーはその直後に車に乗り、ルーシー・マクギニスに運転させて約八百メートル(〇・五マイル)引き返し、ここから右折して近道をさらに八百メートル進行したと書いてある。したがってガソリンスタンドから起算して十一マイルの所で停車すると、コンタクト地点へ行くには遠すぎるのだ。

結論からいうと、二日間にわたる私



▶一九五二年十一月二十日、デザートセンター交差点から十一マイルの地点におけるアダムスキー(右)と助手のルーシー・マクギニス。

たちの調査で判明したのは、十・一マイルの位置で停車し、下三桁が二〇九という数字の付いている電柱の所から砂漠地帯へ入れば最短距離でコンタクト地点へ行けるのである。

### 崩れていた曲線

しかしこの日私たちは十・三マイル辺の所に車を停めて、曲線の残っている沢を目指して歩き始めた。気温は摂氏二十八度、風はなく、快適な天候だ。時刻は十二時。前方には高い岩山がっらなっている。

まもなくケルンを見つけた。十一月のときと同様に真ん中に角材が突き立っている。頭に黒い帽子をかぶったような尖った山が目印になっており、その右のふもとの沢へ入って行く。ここは一昨年夏のGAP海外研修旅行でロス氏の案内により訪れた場所で、コン

タクト地点に接近したと思われるのに暑さと疲労で引き揚げた所である。

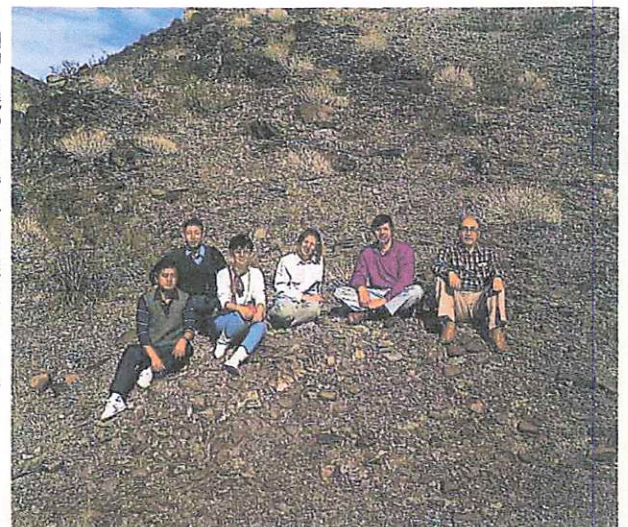
深い川の跡が見えてきたので、一同は右岸の斜面を登って行った。そしてその奥に右側へ登り坂になった急斜面があるので、さらにそれを登ると、途中にケルンが築いてある。川の縁から坂の頂上までを篠さんが巻尺で測ると四十八メートルあった。ケルンは昨年十一月に見たとおりのままで、坂を登りつめると曲線は残っていた。

だが意外にも崩れている。十一月に見た素晴らしい曲線は跡片もなく消え去り、白い石が不規則に並んでいるだけだ。だれかがいたはずなのか。

拍子抜けした私のそばにロス氏が浮かぬ顔をして立っている。一同も無言のまま立ちつくすだけだ。

いたずらではあるまい。二カ月間の風雨で自然に崩れたとしか考えられない。とすると十一月二十日に私たちが発見した美しい曲線は、調査団がそこへ行くことを察知したスペース・ピブルが前夜ひそかに円盤で降下し、傾いた状態で回転しながらタツチダウンしてフランジの縁で地面の石(複数)を擦りながらつけたものなのだろう。三十七年前のものではなかったのだ。

ということはスペースピブルが私たちの動向を知って歓迎の意を表してくれたという意味にもとれるので、そうだとすれば失望するにはあたらない。むしろ注目されていることに感謝すべ

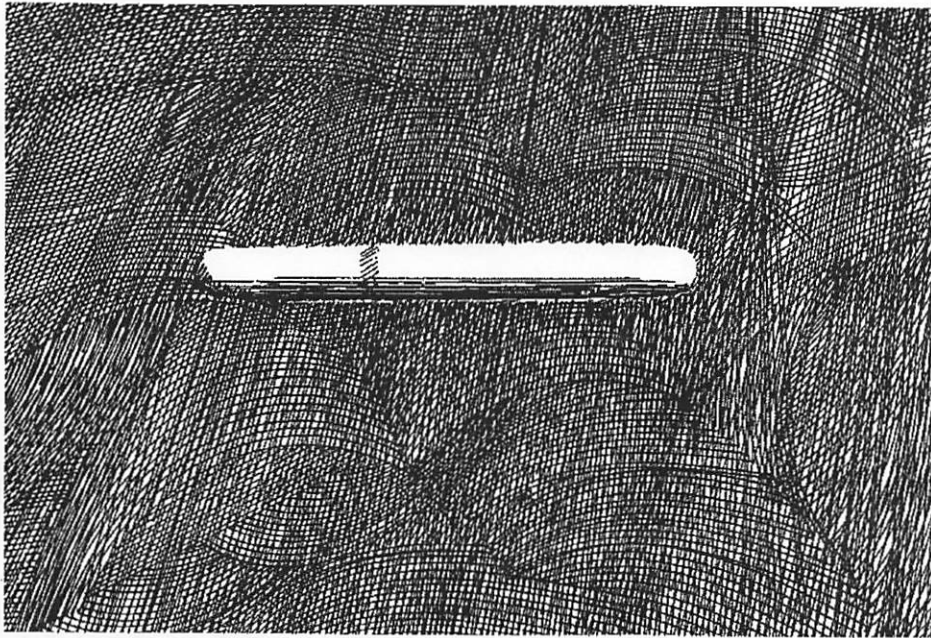


▶山中に残ったくずれた曲線を前にして。

きだろう。

もう一つ気付いた事がある。この坂のふもとの右岸の砂原地帯がコンタクトの現場だと考えて前号の記事で写真を掲載して説明したが(本誌10号二十頁の写真A)、その二点の下の写真、すなわち三十七年前前のコンタクトの直後にウイリアムソンがしゃがみ込んで石膏をとっている写真の中で、両側から張り出している黒い斜面と一致する場所がどうしても見つからないのだ。

十一月には夕暮れがせまったため精査する時間がなかったのだ。ウイリアムソン一行を撮影した人は、たぶん私が撮影した位置よりもっと左後方から撮ったのだろう、そうだとすれば左側の丘の斜面が画面に入ってくるはずだと簡単に考えていたが、今回は時間



▲ 1992年1月27日午後2時3分、デザートセンター上空に突如出現した巨大な宇宙船。左の西方から右方へ進行。久保田が8倍双眼鏡で観察した結果、翼がなく、胴体の中央より少し後方の位置に縦に黒いスジがついていた。他の4名(田中、ロス、篠、加藤)もこの物体を目撃したが、証言内容は一致している。イラスト/久保田八郎

食事後、一同は探索を再開。写真片手にしきりに歩き回る。

「今回見つからねば、わしは切腹ものじや」とつぶやくと、「そのときは私が介錯(いかく)しましょう」と加藤君が軽口をたたく。

「でも刀がないなあ」

「円盤から落としてくれるとよいですね」

こんな冗談も言えるほど一応リラックスはしていた。

二時少し前に私のカメラバッグと取り枠(フィルムホルダー)その他の雑品を入れたバッグがおいてある場所へ

行ってみた。ここはアダムスキーが望遠鏡とともに座り込んでいる場所であることを私が写真により実証したので、加藤君がその場にバッグをおいていたのである。

ここには篠さんが立っていて、馬の鞍はどうもあれらしいと言いつつ、前方の低い岩山を指さして他の人達に説明している。

一見、アダムスキーの写真の丘とは輪郭が相違するが、篠さんの説明によると、岩自体がかなり崩れたために地形が変わっているという。写真中に見える左側の黒いバンク(斜面)も雨による鉄砲水のために地形が大きく変化しているのだろうと言う。

ところで午前中はこの上空を飛行機は全く飛ばなかったのに、午後は頻りに戦闘機が長い白雲を吐きながら飛び交う。日課の訓練なのだろうと気にならずにいたが、これが実は重要な意味をもつことが分かってきた。

二時過ぎ、左方にいた加藤君が叫んだ。

「あれは何ですか?」

「あつ、おかしな物体だ」一同口々に叫ぶ。

「何? 何だ? 見えないぞ。わしは目が悪いなあ」

だが、私もすぐに肉眼でキャッチした。急いで双眼鏡を取り上げて観測する。

見ると、丸みを帯びた白く輝く非常

に細長い物体が、仰角四五度ないし五〇度の碧空を西から東へ飛んでいるではないか! その左下の離れた位置に一機の戦闘機が飛行機雲を残しながら並行に飛んでいる。

物体には翼がない。長い胴体の中心より少し左寄りのあたりに、縦に黒いスジのようなものがついている。尾翼らしきものも見当たらない。

「やーっ、母船だ!」

一同は双眼鏡を目から離さずに騒ぐ。物体は戦闘機よりもうんと上方を飛んでいるのに、はるかに大きいから、よほど巨大な物なのだろう。

このUFOは二時三分から六分まで約三分間見えていたが、やがて右手から別なジェット機が物体の方へ飛んで来たとなんにも不思議にも消えてしまった。

ところが後に加藤君が話したところによると、昼食前に彼はこれと酷似した物体が無音で飛ぶのをもっと大きく見たという。そうするとこのUFOはすでに上空に来ていたのだろうか。

篠さんが馬の鞍はここだと説明していた頃に、田中君が「この場所がそうなら、なにこそサインをみせて下さい」と上空にテレパシーで想念を送ったところ、まもなく物体が出現したのだという。

大体に昼頃からしきりに戦闘機が飛び交うようになったのは、同一のUFOがたびたび上空に出没するのを付近

▼サンフランシスコ沖合の海面に写った不思議な直線状の黒い影。飛行機と等速度で移動し、雲海でもしばらく黒い影が見えていた(下)。突き出ている半島はレイズ岬。 撮影/松村秀之



付記 今回の調査行にはきわめて意義深いものがあつた。全員が一致協力して誠実に行動し、和気あいあいたる雰囲気いそぎのなかにも真剣な決意がみなぎっていた。想念レベルにおいて完全に一体化していたといえるだろう。

私は今回、4×5インチ判大型カメラを携行したためにカメラバッグだけで重量は一〇キロ近くになり、その他の荷物類で身動きできぬ状態だったが、全員が手分けして担いでくれたために大助かりした。人間の善意と奉仕精神の尊さをあらためて実感した次第である。

る。

一方、同行の諸君は英語の重要性を痛感したと言っていた。だが一同はあちこちである程度英語で用を足していたから一応勉強はしてきたらしい。必要にせまられるとやる気を起こすものだということを感じた次第。

また、UFO問題を本格的に研究するには光学機械に関する高度な知識をもち、あざやかに使いこなす技術を習得することも大切だと思う。アダムスキーも望遠鏡、カメラ等の光学機械操作の大ベテランであつたからこそ、あ

れだけの証拠写真を残すことができたのだ。ただし私は今回の母船出現時に撮影する余裕はなかつた。双眼鏡で追跡するのが精一杯だつたからだ。

そして最重要なのはテレパシクな直感力である。上空から送られるテレパシーを感じる能力は絶対に必要である。私はこれによつて数年前にコンタクト地点へ導かれたと信じている。

まだ説明したいことは山ほどあるが、紙数が尽きたので同行諸君の手記を掲げることしよう。これは到着順に掲載したもので順不同である。

## 『馬の鞍』の発見

### ② 篠 芳史

このたびのデザートセンター第五次調査で久保田先生に同行させて頂いたが、大変素晴らしい有意義な成果があり、私達日本GAPのメンバーが先生のご指導のもとにアダムスキー哲学を学ぶことの重要性和その誇りを痛感した。

今までの調査には毎回参加させて頂いたが、新アダムスキー全集第一巻『第二惑星からの地球訪問者』の巻頭に出てくるアダムスキー撮影になる山の『馬の鞍』状の部分にスカウトシツプ(円盤)が半分見える写真と一致する場所がどうしても発見できなかった。

今回私は大変ラックスしていたし、今年も新年になってから充実した気分になり、一月八日の夜は心の暖まるような光体を見たので、デザートセンターでは必ず素晴らしい出来事があると確信していた。

雄大なアメリカに足を踏み入れてから二日目、デザートセンターで、『馬の鞍』の調査にはいった。まず田中淳氏と二人で『第二惑星からの地球訪問者』の記述にある砂漠の調査箇所周辺を巻尺で徹底的に実測した。それからアダムスキー撮影の写真を手にも、合致する地形を捜したが、夕方になつても発見できず、その夜はアダムスキーゆかり